2023年1月1日発行
（毎月1回1日発行）（78巻1号）
ISSN 0035-7774

Digest of Science of Labour

労働の科学

2023
January 1
Vol.78, No.1

不定形の集合／菅沼 緑

特集

多様性を認め合い，より豊かに生きるために(2)

LGBTの方たちが生き生き働ける職場づくり／森 伸恵
知的障害者のチャレンジャーが会社の未来を担う／株式会社ヴィオーラ

巻頭言

「労働科学で社会貢献」を合言葉に
濱野 潤

特別寄稿

労働を主軸に良書を収集・紹介する空間に
遠藤和弘

新連載

ILOインド南アジア産業安全保健通信①
川上 剛

自由と想像―彫刻に向かって①
菅沼 緑

連載

労研アーカイブを読む㉞
岸田孝弥

漂流者たち―クミジョの肖像㉒
本田一成

歌舞伎で生きる人たち その十八
湯淺晶子

芸能従事者の今⑰
森崎めぐみ

大原記念労働科学研究所

Digest of Science of Labour

労働の科学

2023 January 1
Vol.78, No.1

巻頭言　俯瞰（ふかん）
「労働科学で社会貢献」を合言葉に 1
濱野 潤［大原記念労働科学研究所 理事長］

表紙作品：菅沼 緑「不定形の集合」
材料：ベニヤ板
会場：インプレクサス・アート・ギャラリー（盛岡市）
年度：2021年
撮影：菅沼 緑

特集　多様性を認め合い，より豊かに生きるために②

LGBTの方たちが生き生き働ける職場づくり
..... ［弁護士］森 伸恵 5

知的障害者のチャレンジャーが会社の未来を担う
..... 株式会社ヴィオーラ 10

Special contribution

特別寄稿
労働を主軸に良書を収集・紹介する空間に
..... ［独立行政法人労働政策研究・研修機構労働図書館］遠藤 和弘 16

Series

ILOインド南アジア産業安全保健通信（1）
労働における基本的原則と権利 ..... 川上 剛 21

Series

芸能従事者の今 (17)
フリーランスにも産業医を！ ..... 森崎 めぐみ 26

「＃教師のバトン」で伝わる (19)
教職員の過酷な勤務環境 ..... 藤川 伸治 32

漂流者たち クミジョの肖像 (22)
『クミジョ白書2019』⑽ ..... 本田 一成 36

凡夫の安全衛生記 (71)
「さまざまな組織・立場で⑧」グループ会社での３年余 ..... 福成 雄三 38

労研アーカイブを読む (84)
労使幹部層の価値的な集団規範をもとに労使関係分析の試み
..... 岸田 孝弥 40

Column

自由と想像 (1)
彫刻に向かって ..... 菅沼 緑 49

KABUKI
歌舞伎十八番の内 勧進帳
歌舞伎で生きる人たち その十八――縄をない，綱をうつ ..... 湯淺 晶子 50

Talk to Talk
満ちゆくは ..... 肝付 邦憲 52

BOOKS
『LIFESPAN：老いなき世界』
人生120年時代 ..... 椎名 和仁 54

勞働科學のページ 55

次号予定・編集雑記 64

「労働科学で社会貢献」を合言葉に

濱野 潤

はまの じゅん
大原記念労働科学研究所 理事長

コロナパンデミック発生から丸3年になりますが、いまだ収束は見通せないまま、新しい年を迎えました。2022年2月24日に開始され、世界中を驚かせたロシアによるウクライナ侵攻は今も継続しています。日本はそして世界はさまざまな問題を抱えていますが、それらの問題は多様な分野にまたがる事象が短期・中期・長期の時間軸で重層化し、複合化して生じているように思われます。こういう時こそ、複雑な問題を丁寧に解きほぐし、観察や実験から得られる知見から一般的法則へと至る科学が力を発揮すべきであり、エビデンスに基づいて適確に分析し、解決策を見出す調査研究が重要になってきます。

安全・衛生・健康の分野においても課題が山積しており、私ども労働科学研究所はこれらの諸課題の解決に向け、総力を結集して取り組んでまいります。

労研は、一昨年の創立百周年を契機に、次の3つの事業に取り組んでいます。

一つが「働き方の未来を50人が読む」調査で、これまで本誌で2回にわたり調査結果を報告しています。維持会のご協力を得ながら、各界のベストアンドブライテストの皆様からご意見を伺い、分析して結果を公表していますが、第一回と第二回はリモートワークをテーマに取り上げました。調査を通じてリモートとリアルを組み合わせたハイブリッドな働き方の成果や課題が浮かび上がってきました。50人の学識経験者、実務家の皆様のご意見は働き方の未来を考える上での示唆に富んでいます。そして、労研に対するご期待やご要望は今後の労働科学研究を進めていく上での代えがたいエネルギーになっています。

本年は第三回調査に取り組み、その結果は本誌にて公表しますのでお待ちいただければと思います。

2つ目が「地域との連携」です。これまでにもかつて労研が所在していた川崎市などと連携してきましたが、働く場とそれを支える生活の場である地域の視点は労働科学に欠かせない要素です。労研は1921年に倉敷労働科学研究所として発足し、大原孫三郎氏の庇護のもと揺籃期を倉敷で育てていただきましたが、そこで培われた精神は今に至るまで脈々と受け継がれています。本年4月には労働科学発祥の地である倉敷でG7労働雇用担当大臣会合が開催されます。労研としても倉敷市などと協力しG7労働雇用担当大臣会合の成功に向けて所を挙げてお手伝いさせていただきます。

そして、3つ目が「産学協働」です。

学術界、産業界、教育界が中心となって日本労働科学学会が発足して3年になりますが、社会課題の解決を目指すユニークな学会としてこれまで活発な活動を続けており、労研も全面的に支援しています。本年7月には労研が主体となって学会総会を倉敷で開催する予定です。若い方々などより多くの方に日本労働科学学会を知っていただき、学会の活動を通じて労働科学の底辺が広がっていくことを期待しています。

以上、3つの事業をはじめ労研の様々な事業に真摯に取り組み、維持会、大原ネットワーク、桜美林学園など多くの方々に支えられながら、日々研鑽を重ねてまいります。働く現場のさまざまな問題にソリューションを提供し、労働科学で社会に貢献するという我々のミッションを果たす一年にしたいと所員一同心を一つにしています。本年も変わらぬご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。